

# イザヤ書における共同体思想とメシアニズム

## ——「慰め」モチーフをめぐる考察<sup>1)</sup>——

小 友 聡

### 【目次】

1. 序論
2. イザヤ書における「慰め」モチーフ
  - a. 予備的考察
  - b. イザヤ書における **נחם** (ナハム) の用例
  - c. 文献学的考察
  - d. 「慰め」モチーフの意図
  - e. 「慰め」モチーフと「神殿共同体」
3. エルサレム「神殿共同体」再建とメシアニズム
4. 結論的考察：ルカ文書の「教会論」へ

## 1. 序論

我々の課題は旧約聖書における共同体について考察することである。言うまでもないが、旧約聖書全体を範囲として共同体論を展開するとなれば膨大な量の紙数を要するに違いなく、それは我々の目的ではない。我々の考察は当然のことながら、ある範囲に限定される。我々の関心はイザヤ書である。この大部の預言書であるイザヤ書に「慰め」という概念が現われる。この概念はイザヤ書全体において極めて特徴的な意義を有するのみならず、この文書の共同体的思想を鮮明な仕方で浮き彫りにする。その射程はイザヤ書という限られた範囲を越え、注目すべきことに新約思想とも連関する（ルカ2章25節）。これは、「旧約聖書と教会」という与えられたテーマにおいて議論の手がかりになるに違いない。

我々はかつてイザヤ書 61 章の分析によってイザヤ書の共同体論について試論的な考察をした<sup>2)</sup>。それがこの論文の導入になっている。そこにおいて導き出された我々の結論は、ここではいささかも変わってはいない。むしろ、本論文はそれを補強するものとなるだろう。ここで確認をしておきたいことがある。それはイザヤ書に関する方法論の問題である。最近の研究史的状况では、イザヤ書を第一イザヤ (1-39 章)、第二イザヤ (40-55 章)、第三イザヤ (56-66 章) と三分割しそれぞれ別個に扱う従来の方法<sup>3)</sup> に対しては、根本的な疑問が投げかけられている<sup>4)</sup>。例えば、39 章 6-7 節には捕囚時代をほのめかす叙述があり、これは明らかに 40 章以降への導入となっている。そこには「第一イザヤ」と「第二イザヤ」を架橋し連結させようとする編集者の意図がある。また、イザヤ書全体として見た場合、冒頭の 1-2 章部分は「神殿礼拝」に特別な関心を示している点において締め括りの 66 章と明らかに対応する。イザヤ書全体が枠構造を有しているのであって、そこに編集的意図が容易に読み取れる<sup>5)</sup>。つまり、イザヤ書は単なる独立した三つの文書の総体ではなく、むしろ全体として統一性を有しており、そのようなものとして捉え解釈されるべきではないか、という見方が説得的になりつつあるのである<sup>6)</sup>。我々の関心も同様である。もっとも、だからと言って、イザヤ書成立の史実問題を捨象して全体をただ単に共時的に読むという方法は、これまでの研究史的遺産を無視するものであって我々の立場ではない<sup>7)</sup>。我々はイザヤ書テキストの最終形態を尊重すると同時に、イザヤ書編集の最終段階（ペルシア時代後期）において編集者の特別な意図によりイザヤ書テキストが成立したと考える。循環論法の如き拙い説明になるが、イザヤ書の最終形態（現在ある形のテキスト）はイザヤ書編集の最終段階においてテキストとして確定した。我々の立場では、イザヤ書の著者は最終編集者と見なされる。従って、テキストの細部はこの最終編集者の意図を反映していると判断され、またそのような読み取りが可能となる。このように最終形態ということを意識する捉え方でイザヤ書全体を読む場合に、注目される一つの用語が **נחם** 「慰め」である。

## 2. イザヤ書における「慰め」モチーフ

### a. 予備的考察

我々がイザヤ書において注目する「慰め」はもっぱらヘブライ語 **נחם** (ナハム) のピエル形とプアル形で表現される。けれども、ナハムについてはまず解決しなければならない厄介な問題がある。というのも、旧約聖書においてナハムは二つの対照的な意味領域を含み、ピエル形（およびプアル形）とニファル形（およびヒスパエル形）とでは全く意味が異なるからである。ナハムのピエル形にはもっぱら「慰める」という訳語を充てることができるが、それに対し、ニファル形の場合は「後悔する」あるいは「復讐する」という否定的な意味で使用されることがしばしばである<sup>8)</sup>。イザヤ書にもナハムのニファル形の用例は2箇所（1:24; 57:6）あり、「復讐する」と訳すことが可能だ<sup>9)</sup>。このような同一語根ナハムにおけるピエル形とニファル形の意味の両義性はどのように説明すべきだろうか。

これについて、注目されるのはナハムのニファル形が旧約聖書では「後悔する」「復讐する」という意味のほかに、「憐れむ」「慰めを得る」という意味でも用いられることである<sup>10)</sup>。このことは、ナハムが本来、ピエル形であれニファル形であれ、情緒的動きを示す用語であって、対象との親密な関係において行為者の情動的变化を表現していることを示唆する<sup>11)</sup>。心的変化によって行為者が対象を「憐れむ」場合もあれば、対象に「復讐する」場合もありうるのである。そのように考えるならば、語根ナハムの意味領域における両義性がうまく説明できる<sup>12)</sup>。ピエル形がニファル形とは異なり、常に「慰める」という意味で使用されるとすれば、そこにおいて行為者が対象に対して同情を禁じえない何らかの具体的状況が存在するのである。確認するが、ナハムのピエル形は旧約聖書では常に「慰める」という肯定的な意味で用いられる。イザヤ書において我々が注目するのはナハムのピエル形とプアル形である<sup>13)</sup>。

b. イザヤ書における **נחם** ナハムの用例

イザヤ書において、**נחם** ナハムの用例はピエル形で 10 箇所（12：1；22：4；40：1；49：13；51：3, 12, 19；52：9；61：2；66：13）、プアル形で 2 箇所（54：11；66：13）である。またナハムを語幹とする名詞が 2 箇所に見られる（57：18；66：11）。14 箇所の用例すべてを挙げておこう。

ピエル形の用例

- 12：1：「あなたの怒りは翻され、あなたは私を慰めた」  
 22：4：「私を強いて慰めるな、娘なる我が民が滅びたのだから」  
 40：1：「慰めよ、我が民を慰めよ、とあなたがたの神は言われる」  
 49：13：「そうだ、主はその民を慰める」  
 51：3：「そうだ、主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰める」  
 51：12：「私、私こそあなたたちを慰める者」  
 51：19：「誰かが（あるいは）私があなたを慰めるだろうか<sup>14)</sup>」  
 52：9：「そうだ、主はその民を慰め、エルサレムを贖う」  
 61：2：「すべて悲しむ人々を慰めるために」  
 66：13：「母がその子を慰めるように、私もあなたがたを慰める」

プアル形の用例

- 54：11：「苦しめられ、投げ捨てられ、慰めを受けない女たちよ」  
 66：13：「エルサレムであなたがたは慰めを受ける」

名詞の用例

- 57：18：「私は彼を癒し、彼を休ませ、慰めをもって彼を回復させよう」  
 66：11：「あなたがたは彼女の慰めの乳房から飲む」

イザヤ書においてナハムのピエル形は例外なくすべて「慰める」と訳される。プアル形はピエル形の受動であるゆえに、当然のことながら「慰めを受ける」という意味である。また、57：18 と 66：11 の派生名詞も「慰め」と訳される。文脈上のパラレリズムに注目すると、興味深いことに 49：13 では「慰める」は「憐れむ」と同義であり、52：9 では「慰める」は「贖う」と同義であることがわかる。

表現の基本的な形式に注目してみよう。興味深いことに、ほとんどすべての用例において、「慰め」を発動する主語は一人称であれ三人称であれ常に神である。またその対象は「私」(12:1; 22:4), 「あなた」(51:19), 「あなたがた」(51:12; 66:13), 「悲しむ人々」(61:2), 「民」(40:1; 49:13; 52:9), 「シオン」(51:3), 「子」(66:13) と多岐に渡るが、それらは意味上、互いに交換可能である。従って、これらすべての用例は「主はイスラエル（あるいはエルサレム）を慰める」という基本形のヴァリエーションとして説明することが可能となる。これはイザヤ書における「慰め」のすべての用例が確かな共通性を有していることをほのめかす。実際、ナハムのピエル形の用例は預言書全体ではほかに7箇所（エレ 16:7; 31:13; エゼ 14:23; 16:54; ナホ 3:17; ゼカ 1:17; 10:2）しかなく、エレミヤ書とエゼキエル書にはそれぞれ2箇所だけである。これらの用例箇所の由来はいずれも捕囚期あるいはそれ以降を想定しうる。イザヤ書に10箇所もの「慰め」の用例が集中し、それらが互いに共通性を有するとすれば、そこには何らかの意図があるはずであって、我々の関心は大いに増す。

### c. 文献学的考察

ナハムのニファル形の用例の分布を整理してみると、いわゆる第一イザヤの部分に2箇所、いわゆる第二イザヤに7箇所、いわゆる第三イザヤに5箇所である。文献学的に若干の考察をしておこう。

まず指摘すべきことは、「慰め」の最初の用例が12章1節だということである。これは極めて注目すべき点である。なぜなら、12章はいわゆる第一イザヤ(1-39章)において全く異論なく編集部分と見なされるからである。1-12章はイザヤ書全体の構成において最初の一まとまりである。1-11章はもっぱら審判預言であって、その締め括りとなる終末論的頌栄が12章である。その頌栄の言葉の冒頭に、救済の約束が「慰め」という用語で示唆される。このことは12章の「慰め」が明らかにイザヤ書全体の編集的モチーフであることを示す<sup>15)</sup>。

2番目の用例は22章4節。ここでは「慰め」が否定的な文脈で出て来る。文

脈がエルサレムの崩壊をはっきりと示唆している以上、これを預言者イザヤの文脈で紀元前 701 年のセナケリブによるエルサレム遠征を記述したものと見るのは短絡的である。むしろ 586 年のエルサレム神殿崩壊およびイスラエル民族滅亡を前提した表現だと見るべきである<sup>16)</sup>。実際、エルサレム崩壊を記述する哀歌 1 章 16-17 節でも「慰め」は同様に否定的文脈で用いられている。そうだとすれば、22:4 も第一イザヤに属するものではなく、むしろ 40 章以降の歴史的状況であることをほのめかす。3 番目の用例は 40 章 1 節。捕囚期を舞台背景とするいわゆる第二イザヤの冒頭部分である。開口一番に、しかも繰り返して「慰めよ」という命令が語られる。この「慰め」は 40-66 章の導入語である。この印象的な「慰め」命令には 12 章 1 節の用例がこだましているとは言えないだろうか<sup>17)</sup>。すでに指摘したように 12 章は編集部分であって、いわゆる第一イザヤの文脈（紀元前 8 世紀の預言者イザヤの時代）からはみ出しており、その限りにおいて第二イザヤと結びつくからである。12 章 1 節に見られる最初の「慰め」モチーフは 22 章 4 節を経由して、40 章 1 節のそれを示唆し、方向付けていると考えられる<sup>18)</sup>。

重要なのは、いわゆる第二イザヤの部分に見られる 7 箇所（箇所）の用例である。注目すべきことに、これらはいずれも主語（あるいは語りかける主体）は神であって、しかもほとんど同一の表現と見なし得る。「主は民を慰める」は 40:1; 49:13; 52:9 で共通しており、「慰め」の対象である「民」は 51:3 では「シオン」、51:12 では「あなたたち」、51:19 では「あなた」と同義に言い換えられる。さらにまた、54:11 の「女たち」は都エルサレムを指しており、明らかに「シオン」と同定できる。従って、これら 7 箇所はいずれも 40:1 の「慰め」を起点として連鎖していると想定できる<sup>19)</sup>。

それでは第三イザヤの 5 箇所はどうであろうか。61:2 は「すべて悲しむ人人を慰める」と表現される。この「すべて悲しむ人々」は文脈上、4 節の「廢墟」を嘆き悲しむ人々のことであって、すなわちエルサレム神殿の崩壊を悲しむ人々を指している<sup>20)</sup>。これは表現上、明らかに 51:3 と連関しており、第二イザヤの用例（40:1; 49:13; 51:3, 12, 19; 52:9; 54:11）と結びつく<sup>21)</sup>。

第三イザヤの部分で注目すべきは 66 章に三つの用例が集中していることである。66:13 のプアル形表現「あなたがたは慰めを受ける」は能動態にすると「主はあなたがたを慰める」となり、しかも場所はエルサレム（シオン）であるから、51:12 とほとんど同じ意味となる。66:13 のピエル形表現では主が「母」と比喻され、66:13 の名詞表現「慰めの乳房」と意味上、繋がっている。言うまでもないが、この 66 章はイザヤ書の最終章であり、イザヤ書の枠組である。この部分が 1-2 章と対応してイザヤ書全体の枠組を構成し、最終的編集部分であることはすでに指摘した。

このように考えるならば、イザヤ書の「慰め」は決して無秩序に 14 箇所点に在しているのではない。むしろそれはイザヤ書全体を網羅する編集的モチーフなのであって、互いに連鎖し、繋がっていることが説明できる。これによって、イザヤ書の「慰め」において一貫した意図を読み取ることが可能となる。

#### d. 「慰め」モチーフの意図

イザヤ書の「慰め」モチーフにおいて共通したものは何だろうか。まず注目したいのは、「慰め」を発動する主体が常に神だということである<sup>22)</sup>。しかも、その対象が民であり、あるいはシオンであり、あるいはエルサレムである。主こそが民・シオン・エルサレムを慰める。これがイザヤ書の「慰め」モチーフにおいて全く共通した意味内容である。ここにおいて、「慰め」モチーフが具体的なメッセージを含んでいることがほのめかされる。そこで、改めて注目するのは 51 章 3 節である。

「そうだ、主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰める。」

この表現が同義的並行法によって構成されていることは確かである。それゆえ、「シオン」と「そのすべての廃墟」は同義となる。またシオンとはエルサレム（神殿）を指す表現であって、シオンは崩壊し廃墟となったままである。

それならば、「廃墟を慰める」とはいったいどういう意味だろうか。紀元前 586 年に陥落したエルサレム、とりわけ破壊されたエルサレム神殿が「廃墟」となっているゆえに、「廃墟を慰める」とは「廃墟を再建すること」を意味する

表現であることは容易に予想しうる<sup>23)</sup>。実際、61章2節には「慰め」モチーフが現われ、その直後にはっきりと「廢墟を建て直す」と記されている(58:12参照)。我々の分析によれば61章はいわゆる第三イザヤの中心であり、また捕囚解放後の神殿再建という課題が時代背景に存在する<sup>24)</sup>。このような神殿再建は第三イザヤにおいて中心的主題である。けれども、神殿への特別な関心は、決して第三イザヤにだけ見られるものではない。なぜなら、イザヤ書冒頭の1章では神殿祭儀が問題となり、2章では神殿礼拝が終末論的預言として記されるからである。またイザヤ書最後の66章では神殿祭儀とともに神殿礼拝がやはり終末論的文脈で記される。すなわち、神殿への関心はイザヤ書全体の枠組にも容易に見て取ることができるのである。イザヤ書全体の枠組は、当然のことながら、最終編集者の手によるものだと判断できる。しかもその部分に「慰め」モチーフが繰り返し出て来るのである(66:13)。そうだとすれば、イザヤ書の「慰め」モチーフは最終編集者に帰するものであり、そのモチーフの中には「廢墟(となった神殿)を建て直す」という意味が摺り込まれていると考えられるのではないだろうか。

「神が民を慰める」とは、神が廢墟となった神殿を建て直し、民を再建するという意味である。そのメッセージが12章1節を皮切りに、40章1節には命令形で告げられ、66章13節ではそれが主の約束として最終的に確認されるのである<sup>25)</sup>。要するに第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤというテキストの垣根を越えて、イザヤ書全体にいわば置き石のように「慰め」モチーフが置かれているのであって、そこに神殿再建というイザヤ書最終編集者の特別な意図を見ることができる。イザヤ書に現われる「慰め」はいずれも最終編集者の意図に拠る神学的モチーフである。

#### e. 「慰め」モチーフと「神殿共同体」

歴史的背景について考えてみよう。イザヤ書の「慰め」モチーフは紀元前515年のエルサレム神殿再建を示唆し、また神殿再建をめぐるメッセージがそこに盛り込まれている。そもそも神殿再建とはどういう意味を有するだろうか。神

殿再建は、崩壊し失われたエルサレム神殿の再建であって、神殿を中心にした祭儀共同体の復興を意味する。紀元前 586 年に失われた神殿が暗黒の捕囚時代を経、ペルシア帝国の支援を受けた捕囚帰還民たちの手によってついに再建される。それは失われたイスラエル民族の再興と言ってよい奇跡的な出来事であった。同時代について記すエズラ記 9 章 9 節によれば、神殿再建がまさしく神の業であったと告白される。「(神は) ユダとエルサレムで私たちの神の神殿を再建し、廃墟を復興し、城壁を得るようにして下さいました」。また、再建に先立って神殿の基礎が据えられた時には、感極まった人々の歓喜がこう叙述されている。「年老いた祭司たち、レビ人たち、家長たちの中にはかつての神殿を見た人も多く、彼らはこの神殿の基礎が据えられるのを自らの目で見届けて、大声を上げ泣いた。また、多くの者が歓喜のあまり大声を張り上げた。歓喜の叫びと泣き声とは互いに入り混じって、民にはどれがどれとも聞き分けられないほどであった」(エズラ記 3 章 12-13 節)。これらの記述は、神殿再建の歴史的意義を物語っている。

イザヤ書において「慰め」が「神殿の再建」を意味することを我々はすでに確認した。神殿の再建こそはまさしくエズラ記に記されるように、イスラエルの民にとって「慰め」であった。神殿の再建はただ単に神殿という建物の再建だけを意味するのではない。それは消滅した「共同体」全体の復興を意味する。捕囚の地から帰還した民とエルサレムに残った民とが、神殿再建において「イスラエル」として復興したということである。この点で注目すべきはゼカリヤ書 1 章 16-17 節の用例である<sup>26)</sup>。

「それゆえ、主はこう言われる。『私は憐れみをもってエルサレムを顧みた。我が神殿はそこに再建される。一万軍の主の言葉— エルサレムの上に測り縄が張られる』と。再び呼びかけよ、万軍の主はこう言われる。『私の町々は再び恵みに満ち溢れるだろう』と。主は再びシオンを慰め、エルサレムを再び選ばれる。」

この 17 節に見られる「慰め」<sup>27)</sup> は、神殿の再建 (16 節) を指すと同時に、神によるエルサレムの選びを表現している。事柄はイザヤ書の場合と全く同じで

ある。ゼカリヤ書において神殿再建とは共同体の復興であるように、イザヤ書において「慰め」は神殿共同体あるいは祭儀共同体がもう一度「神の民」として建設されることを意味する。要するに、イザヤ書の「慰め」モチーフには徹頭徹尾、共同体的思想が含まれているのである。「廃墟を慰める(=再建する)」という 51 章 3 節の特徴的表現がこれを決定的に裏書きしている。イザヤ書に見られる「慰め」モチーフはこの書の最終編集者の確固とした共同体形成理念を示しているのである。従って、イザヤ書の最終編集者の時代は捕囚期末期ではなく、捕囚後のユダヤ教団成立の時期（ペルシア時代後期）を考えるのが適当ではないかと思われる<sup>28)</sup>。

### 3. エルサレム「神殿共同体」再建とメシアニズム

イザヤ書において「慰め」モチーフが「神殿共同体」再建を意図していることを我々は説明した。これに関連して注目したいのはイザヤ書のメシアニズムである。イザヤ書において、神殿共同体の再建はメシアニズムと結びついているのではなかろうか。

いわゆる第一イザヤにおいては 7 章, 9 章, 11 章にメシアニズムが見られる。7 章ではダビデ家のアハズ王との関連で「インマヌエル」(14 節) と呼ばれる王の出現が予告される。9 章では「ダビデの王座」(6 節) に就く「一人のみどりご」(5 節) の出現が予告される。11 章では「エッサイの株」(1 節) から出る一つの **נצר** ネットエル「若枝」(1 節) の出現が予告され、しかもエルサレム神殿をほのめかす「聖なる山」に言及する (9 節)。いずれの場合も、ダビデの血筋にメシアが誕生するというダビデ契約を基盤とした預言的記述として重要である。これらは、「エッサイの株 (切り株!)」がほのめかすように、すでにダビデ王朝の断絶 (紀元前 586 年のエルサレム陥落) を前提した編集的記述であると説明しうる<sup>29)</sup>。これらに関連して重要なのは、36-39 章のイザヤ物語に見られるヒゼキヤの頌栄である。ヒゼキヤはエルサレム神殿を守ったダビデ王朝の王であり、そのような者としてメシアニズムの基盤としての役割を果たす。

続くいわゆる第二イザヤには、ダビデ契約的表現はほとんど見られない<sup>30)</sup>。

捕囚期が第二イザヤの舞台設定であって、ダビデ王朝が断絶しているという事実認識がはっきりと読み取れる。この第二イザヤの場合には、実に奇妙なことに、ペルシア王キュロスが「油注がれた者」すなわちメシアと同一視され、神殿を再建する者と期待される<sup>31)</sup> (44:28-45:1)。また、その前後には「主の僕」が謎めいた仕方で預言され (42:1-4; 49:1-6; 50:4-9; 52:13-53:12)、その僕は苦難の極みで贖罪の死を遂げる (52:13-53:12)。ダビデ的メシアの称号は見られないけれども、そこに隠れたメシアニズムを見ることは可能である<sup>32)</sup>。なぜならダビデ王朝がすでに断絶している捕囚期以降において、メシアニズムは歴史の基盤と現実感覚を喪失し、極めて観念化し空想化していると説明しうるからである<sup>33)</sup>。このようなメシアニズムは現実的不可能性を示唆するものであって、その限りにおいては、第一イザヤに見られるメシアニズムとも通底していると言わざるをえない。第一イザヤのメシアニズムは第二イザヤのそれと思想的な連続性を有するのである。

第三イザヤにおいて我々が注目するのは 61 章 1 節である。

「主は私に油を注ぎ、主なる神の霊が私をとらえた。」

ここには「私」なる人物への「油注ぎ」が記される。これは通常、第三イザヤの預言者としての召命と説明されるが、確かな証拠はない<sup>34)</sup>。旧約では油注がれるのはほとんどの場合、王か祭司であって、預言者が「メシア」となる必然性は必ずしもない<sup>35)</sup>。重要なことは、この「油注ぎ」の記述の直後 (61 章 2 節) に「慰め」モチーフが現われることである。イザヤ書において「慰め」モチーフが「神殿共同体の復興」を意図している以上、ここでの油注ぎは、神殿再建をもたらす「ダビデの血筋」として王的メシアについて語っていると見るべきではないだろうか<sup>36)</sup>。このことはゼカリヤ書 6 章 12-13 節の記述から説明できる。

「万軍の主はこう言われる。『その人を見よ、その名を若枝と言う。その足下から若芽を出している。彼は主の神殿を再建する。彼こそ主の神殿を再建し、彼こそ威光を担い、その王座に座し、統治する。その王座の傍らには一人の祭司がおり、二人の間には平和の計画がある』と。」<sup>37)</sup>

ここで「若枝」צמח と呼ばれる者は「神殿を再建する者」であり、ゼルバベルを指す<sup>38)</sup>。ゼルバベルはエルサレム神殿再建を導いた指導者であって、しかもダビデの血筋を引く「油注がれた者」であった（ゼカ4:14）<sup>39)</sup>。ゼカリヤ書によれば、「若枝」צמח は「主の僕」とも呼ばれている（ゼカ3:8）<sup>40)</sup>。興味深いことに、「若枝」צמח という特徴的な名はイザヤ書の終末論的文脈の中にも現われる（4:2）。イザヤ書61章1節で油注がれるメシア的人物は、史実的にはこのゼルバベルをほのめかしているのではなかろうか<sup>41)</sup>。ゼルバベルがダビデ王朝断絶後の王的メシアの登場を意味する限りにおいて、我々は第三イザヤに、第一・第二イザヤに見られたメシアニズムとの連続性を読み取ることができる。けれども、イザヤ書のメシアニズムはゼルバベルにおいて成就することなく、終末論的な希望へと転じている<sup>42)</sup>。この終末論的希望はイザヤ書に特徴的な普遍的救済論と無関係ではない（例えば19章23-25節）。

いずれにせよ、イザヤ書のメシアニズムはダビデの血筋と関係し、しかも最終的に共同体再建すなわち「慰め」を成し遂げる王的メシアを指す。イザヤ書全体に見られるすべてのメシア記事は、「イスラエル（エルサレム）を慰める者は誰か」「神殿共同体を再建するメシアとは誰か」という救済史的な問いを跡付けていると考えられる。その意味において、イザヤ書における共同体思想とメシアニズムは必然的に結びつくのである。

#### 4. 結論的考察：ルカ文書の「教会論」へ

イザヤ書において共同体再建の思想はメシアニズムとからみ合い終末論化している。最終編集者の手による「慰め」モチーフからそれは明瞭である。このこととの関連で注目すべきは新約聖書、ルカ福音書2章25節の記述である。

「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。」

この記述によれば、エルサレム神殿の境内で老人シメオンはイスラエルの「慰め」を望んでいた<sup>43)</sup>。これが主イエス・キリストの到来を予告する記述である

ことは確かである。ここでは、「慰め」παράκλησις という用語においてエルサレム神殿とメシアニズムが結びついている。エルサレム神殿は現実存在するにもかかわらず、シメオンはイスラエルの慰めを待ち望んでいる。そこには、明らかに「新しい神殿共同体」の建設を待望する終末論的期待がある。主イエスは「イスラエルを慰める」ダビデの血筋のメシアである。すなわち、主イエスこそ「慰める者」であり、新しい神殿共同体を建てる終末のメシアであるという福音書記者の鮮明な認識がそこにある<sup>44)</sup>。

ルカ文書はエルサレムを救済の起点として世界史的な教会論を展開している<sup>45)</sup>。言うまでもなく、その成就がペンテコステの出来事である。そうであるとすれば、ルカ文書の教会論はイザヤ書のメシア的共同体思想と連続性を有すると言わざるを得ない。なぜならば、イザヤ書の「慰め」モチーフには共同体形成理念とメシアニズムが不可分に結びついているからである。ルカ文書記者はイザヤ書の「慰め」モチーフを知っており<sup>46)</sup>、そこに含まれる共同体形成理念を主イエス・キリストの到来に結びつけたのである。ルカ文書記者にとって「新しい神殿共同体の建設」すなわち「慰め」を成し遂げる者は、終末の王的メシアたるキリストである（3：27 参照）。そうであるとすれば、ルカ 4 章 18 節においてイザヤ 61 章 1 節が引用されていることも、ルカ文書記者の教会論から説明しうるであろう。

結論を記そう。イザヤ書に見出される旧約のメシア的共同体思想は、それ自体として新約における教会論を方向付けているのである。我々はイザヤ書の「慰め」モチーフに注目し、その 14 箇所用例を辿ることによって、イザヤ書の共同体思想の輪郭線を浮き彫りにした。そして、これが、注目すべきことにルカ文書の教会論に繋がるものであることを示した。旧約聖書の共同体思想は間違いなく「教会」の思想的基盤となっているのである。（おとも・さとし）

## 注

- 1) 本論文は、2004 年 1 月 26 日開催の「教団 21 第 16 回研修フォーラム」において筆者が発題した「教会論——旧約聖書における共同体」の後半部分を書き

改めたものである。

- 2) 拙論「福音を伝えるために主が私を派遣した——イザヤ書 61 章における共同体再建の理念——」, 『神学』 63 号, 2001 年, 65-79 頁。
- 3) B. Duhm, *Das Buch Jesaja*, 1892 (HKAT) 以来, このようにイザヤ書が三分割されて扱われてきた。
- 4) 邦語文献としては, R. E. クレメンツ (飛鳥井訳) 「イザヤ書の統一性」, 『インタープリテーション』 15 号, 1992 年, 21-23 頁。越後屋朗「イザヤ書の現在」, 『基督教研究』, 1994 年, 18-37 頁。大島力「統一体としてのイザヤ書——研究史概観と問題の所在——」, 『キリスト教と文化』 紀要 19, 2003 年, 49-77 頁などがある。
- 5) D. Carr, “Reading for Unity in Isaiah”, *JSOT* 57 (1993), 73; A. J. Tomasino, “Isaiah 1,1-2,4 and 63-66, and the Composition of the Isaianic Corpus”, *JSOT* 57 (1993), 81-98; R. Rendtorff, “Zur Komposition des Buches Jesaja”, *VT* 34 (1984), 305f..
- 6) 例えば, 大島力「イザヤ書の全体構成における 36-39 章の位置と機能」, 大野他編『果てなき探究』, 2002 年, 269 頁。大島氏はイザヤ書の統一性に関する浩瀚な博士論文『イザヤ書は一冊の書物か? ——イザヤ書の最終形態と黙示的テキスト』, 2004 年, を刊行した。
- 7) R. Rendtorff, “The Book of Isaiah: A Complex Unity. Synchronic and Diachronic Reading”, in: R. F. Melugin and M. A. Sweeney (eds.), *New Visions of Isaiah*, 1996 (JSOT. S 214), 32-49 を参照。
- 8) 例えば, 創 6:6, 7 を見よ。
- 9) W. Gesenius, *Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament*, 1962 (17. Aufl.), 498. なお 57:6 のナハムは翻訳が厄介である。これは 57:5 冒頭の表現と語呂合せで対応しており, そのように理解するならば, 「裁きを撤回する」とも訳せる。これについては H. Van Dyke Parunak, “A Semantic Survey of NHM”, in: *Biblica* 56 (1975), 531 を参照。
- 10) 例えば *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon* (BDB), 1906, 637.
- 11) D. C. Raney II, “Does YHWH Naham? A Question of Openness”, *JBL* 2003 Seminar Papers, 2003, 106.
- 12) 並木浩一『「ヨブ記」論集成』, 2003 年, 204-206 頁。並木氏はヨブ記におけるナハムの語義について説得的な説明をしておられる。
- 13) W. A. M. Beuken, *Jesaja 1-12*, 2003 (HThKAT), 334 Anm. は, イザヤ書におけるナハムのピエル形とニファル形の間に意図的な連関があることを指摘してい

る。

- 14) この「慰める」はピエル形未完了一人称単数に二人称男性単数の語尾が付いている。BHS 脚注の読み替え提案に従えば、「誰かがあなたを慰めるだろうか」となる。
- 15) R. Rendtorff, “Zur Komposition des Buches Jesaja”, 315-317. レントルフは、ナハムが 1-12 章と 40-55 章を結びつける機能を果たしているとする。
- 16) R. E. Clements, *Isaiah 1-39*, 1980 (NCBC), 182-184; R. Kilian, *Jesaja II 13-39*, 1994 (NEB), 133 ははっきりとそう見る。J. Blenkinsopp, *Isaiah 1-39*, 2000 (AB), 334 もその可能性を指摘する。
- 17) R. Rendtorff, op.cit., 315.
- 18) W. A. M. Beuken, op.cit., 334.
- 19) H. J. Fabry, Art., ׀׀׀“, in: *TDOT* 9, 1998, 351.
- 20) 拙論, 73 頁。
- 21) H. G. M. Williamson, “From One Degree of Glory to Another: Theme and Theology in Isaiah”, in: E. Bell (ed.), *In Search of True Wisdom*, 1999 (JSOT. S 300), 182.
- 22) H. J. Fabry, op.cit., 351.
- 23) Ibid..
- 24) 拙論, 74-75 頁。
- 25) U. Berges, *Das Buch Jesaja*, 1999 (HBS 16), 32.
- 26) ゼカリヤ書 1 章 7-17 節の「第 1 の幻」冒頭にある「ダレイオスの第 2 年目」とは紀元前 520 年であり、エルサレム神殿再建を予告する記述である。
- 27) これはイザヤ書 51 章 3 節と同じ表現である。
- 28) M. A. Sweeney, “The Reconceptualization of the Davidic Covenant”, in: J. Van Ruiten and M. Vervenne (eds.), *Studies in the Book of Isaiah*, 1997 (BETHL CXXXII), 60-61; Ders., “The Book of Isaiah as Prophetic Torah”, in: R. F. Melugin and M. A. Sweeney (eds.), *New Visions of Isaiah*, 1996 (JSOT. S 214), 52, 56. スウィーニイは我々と同様、イザヤ書の最終形態の成立を紀元前 5 世紀末のエズラ改革の時期に見ている。
- 29) H. G. M. Williamson, “The Messianic Texts in Isaiah 1-39”, in: J. Day (ed.), *King and Messiah in Israel and the Ancient Near East*, 1998 (JSOT. S 270), 269-270. ウィリアムソンはイザヤ書 7, 9, 11 章のメシア的記述がいずれもダビデ王朝の断絶を前提すると見ている。

- 30) 第二イザヤでは 55:3 ただ 1 ヶ所のみの用例。
- 31) 歴代誌下 36 章 23 節, エズラ記 1 章 2 節参照。
- 32) 例えば, J. W. Watts, *Isaiah 34-66*, 1987 (WBC 25), 201-203 は「主の僕」をユダ王家の血筋にあたるゼルバベルだと断定している。ゼルバベルは神殿再建を遂行した指導者である(これについては後述する)。ワッツによれば, 「主の僕」の謎めいた姿はそのゼルバベルを予想させるという。これは可能な見方だと思われる。
- 33) これについては, C. レヴィン(山我訳)『旧約聖書』, 2004 年, 235-236 頁参照。
- 34) W. A. M. Beuken, “Servant and Herald of Good Tidings. Isaiah 61 as an Interpretation of Isaiah 40-55”, in: J. Vermeylen (ed.), *The Book of Isaiah*, 1989 (BETHL LXXXI), 413-415; H. G. M. Williamson, “From One Degree of Glory to Another”, 178-179.
- 35) 列王記上 19 章 16 節では預言者(エリシャ)への油注ぎが命じられる。ただし, この 15-16 節では, ダビデ王家の血筋でないイエフやさらには外国人のハザエルへの油注ぎも命じられている。これは極めて特殊な用例と見なさざるを得ない。我々はこの個所を「油注ぎ」の例外的記述と考える。これについては, K. Seybold, Art., „מִשָּׁח“, in: *TDOT* 9, 1998, 48 を参照。
- 36) H. G. M. Williamson, op.cit., 184. ウィリアムソンも第一イザヤと第二イザヤに見られるメシア的記述との関連を指摘する。ただし, 彼は, 第二イザヤの文脈において 61:1 の「油注がれる者」がキュロス王(45:1)をほのめかしているを見る。
- 37) 神殿再建を指導したのは, ダビデの血筋であるゼルバベルと大祭司ヨシュアの二人である。これについてはハガイ書 1 章およびエズラ記 3 章を見よ。
- 38) J. Blenkinsopp, “The Servant and the Servants in Isaiah and the Formation of the Book”, in: C. C. Broyles and C. A. Evans (eds.), *Writing and Reading the Scroll of Isaiah*, 1997 (VT. S 70,1), 158.
- 39) ゼルバベルがダビデの血筋であることは, 歴代誌上 3 章 19 節に記されている。
- 40) 字義通りには「我が僕」。ハガイ書 2 章 23 節も同様。
- 41) 実際, イザヤ書 61:11 には「若枝」 צֶמַח を示唆する表現 יִצְמִיחַ 「主は芽生えさせる」が見られ, ゼルバベルをほのめかしている。
- 42) M. ノートによれば, ゼルバベルに対して民衆のメシア待望が高まったが, あえなく期待はずれに終わった。M. ノート(樋口訳)『イスラエル史』, 1983

年, 390-392 頁参照。

- 43) 三好迪『小さき者の友イエス』, 1987 年, 77 頁参照。
- 44) A. Plummer, *The Gospel according to S. Luke*, 1981 (ICC), 66.
- 45) E. シュヴァイツァー (佐竹訳)『新約聖書における教会像』, 1984 年, 96 頁。
- 46) O. Schmitz, Art. „παρακαλέω“, in: *TDNT* V, 1967, 798.